調査全体をふりかえって

日本のお父さんへ
「あなたはかわいそう！」が監修の言葉

白梅学園大学学長　汐見　稔幸

「日本のお父さんは、ホント、かわいそうだなぁ。」これが、本調査の結果をていねいに読んだあとに私の口から最初に出てきた言葉だった。奇をてらっていっているのではない。本当にそう思ったのだ。

日本の父親は、いわゆる先進国の中でもっとも家事・育児をしていないということが世間にわかってきたのは、今から十数年前、子育て支援が国の政策になったあとだったと思う。OECD等の調査では、日本の父親は今でも欧米の父親の３分の１程度の時間しか家事・育児をしていない。少子化の克服は家庭での父親の自覚にかかっているとして、20世紀の最後に厚生省（現厚生労働省）が「育児をしない男を、父とは呼ばない」とのことばを載せたポスターを配布したのは記憶に新しい。事態は徐々に改善されてきていると思うが、まだ欧米の３分の１なのだ。

日本人は、いつも外国から示されないと自分たちのことを客観的に認識しないとよくいわれる。父親のありかたについてもそのとおりで、労働時間の長さも、日本の中にいては問題とされることがあまりない。今ぐらいの働きかたは当然だと思っている人がまだ多い。しかし、グローバルスタンダードは相当異なるのだ。フランスのサラリーマンも今は年間平均労働時間が1,600時間を切っている。１日平均にすると６時間半だ。

カナダは、しばらく前、父親の長時間労働がそのメンタルヘルスを損なっているとして、国をあげて父親支援（労働時間短縮）の活動をした。その企画案（MDMBプロジェクト＝“My Dad Matters, Because…”「僕はパパが大事、だって…プロジェクト」）を出したティム・パケットと私は公開で対談したことがある。そのとき「父親の長時間労働が問題になっているというけれども、カナダではどのくらい遅くまで働いているのですか」と質問した。ティムはそれに対して「そうですね、ひどい人なんか夜の７時頃まで働いていますよ」と答えたので、あとの言葉が出なかった。

日本にいると、午後７時頃に帰る人は幸せなのだが、グローバルスタンダードはそうではない。不幸な人なのだ。今回の調査でも、午後８時台に帰宅する人が依然もっとも多いという結果であったが、男性の家庭・地域での自己実現にとって根本の問題がハード面で阻害されているということを明確に示す結果だった。北京、上海では午後５時台の帰宅が最頻値であったのとは対照的だ。

考えてみれば、先のような家事・育児時間の比較は同等の条件で行うべきなのだ。日本のお父さんたちは、10キロ走って疲れて戻ってきて、さあリングに上がって待ち受けていた欧米の父親とボクシングの試合をしろ、といわれているようなものだ。そのうえ日本は都市部では通勤にも時間がかかる。あるドイツ人に日本人は場合によっては通勤に往復３、４時間かけているというと、彼は「ドイツではそういうのは旅というよ」と冗談半分でこたえた。毎日旅をして、戻って家事・育児をしようとしている日本のお父さん、あなたはかわいそう！

そうした厳しい条件のもとでも、日本のお父さんは随分がんばっているということを今回の調査は示唆している。長時間労働で帰宅時間の遅い日本のお父さんだから、ウィークデイの子どもとのかかわりは必然的に少なくなる。けれども、週末に子どもとかかわる時間は、比較した東アジアの４都市ではトップだった。懸命に子どもとの時間をつくろうとしている涙ぐましい姿が浮かんでくる。立ち会い出産率も５割を超えた。仕事から帰って毎日子どものことを妻と話すという父親は９割近くになった。そして、そういう自分を「よく育児している」と自認しているという父親も５割を超えた。

グローバルスタンダードからすれば、日本のお父さんの家事・育児時間は惨めなほどなのだが、日本スタンダードからすれば、疲れたからだにむち打ってがんばっているのだ。これほどの長時間労働で、通勤にも時間をかけて、帰宅してからなお子どもとつきあおうとする日本のお父さん、あなたはえらい！　だれしもこういいたくなるのではないか。

しかし、そうした父親の役割を何とかこなそうとしている日本の父親も、心の中は不安で自信がない状態でいるということも、今回正直にあらわれた。たとえば、育児休業を取りたいが取れないという理由のトップが「職場に迷惑をかけるから」で、４年前に比し、この項目の比率ののびがもっとも大きくなっていた。経済不況の中、自分だけが家族のことを優先するわけにはいかないということなのだろうが、実はそれは日本経済の自信のなさが個人に屈折して反映しているのだと読み取れる。

家庭において、主観的にはがんばって父親の役割を担おうとしているのに、「自分は妻に必要とされている」と思うかという問いに対して「とてもあてはまる」と答えた自信派が、日本は20％強しかいなかった。これなど日本の父親が自信喪失状況にあることを典型的にあらわしている。しかも05年に比して14％以上も減少しているのだ。４都市比較でも、同じ質問に対して「とてもあてはまる」とした自信派は、東京の23％強に対して、ソウルは65％強、北京、上海は約50％であった。日本は格段に少ないのだ。

それなりにがんばって育児・家事をしているけれども、妻の気持ちを安心させるような家庭づくりやかかわりのありかたは、残念ながらできていないということだろう。経済や社会の今後への不安がとても大きく、それが個々の父親の心理に反映している。今回詳しく調査できなかったが、国民全体のモラールと父親の自信度は強く相関しているように思われてならない。せっかくがんばっているのに、自信がなかなか得られない日本のお父さん、あなたはかわいそう！

育児をする主体としての立場から将来の不安事項をあげてもらうと、トップスリーは「将来の子どもの教育費用が高いこと」「育児費用の負担が大きいこと」「自分の収入が減少しないかどうか」とすべてお金の問題であった。子どもなんて生んでしまえば何とかなるものと以前はよくいったものだが、今はそう単純なことはいえない時代だということが如実に浮かび出た。実際に日本の育児は、お金がかかる。OECD調査では、調査可能な加盟国の中で、教育にかけている公費の比率がもっとも低いのが日本だとわかった。逆にいうと、教育にかかる費用の私的負担率が日本はもっとも高いということだ。家のローンと教育費。この２つを払うために一生働き続けるのが日本のお父さん。年貢を納めるためにのみ一生働いた江戸時代の農民から、どれだけ進歩したのかといいたくなる現実がみえてくる。

日本のお父さんは基本的に家事・育児の世界ではがんばっている。その必死さに、世間はもっと共感すべきだ。日本のお父さん、あなたはかわいそう。でもやがて日本も変わるよ……とエールを送ってほしい。